

『資本論』の体系と著述プラン（承前）

三 宅 義 夫

以上(一)において明かにしようとしたもつとも主要な点は、『資本論』において、「われわれはただ、資本制生産様式
一般的本性」を把握せんとするものだというようにいっている（Ⅲ一三二頁）ことから見て、『資本論』での叙述内容
の性質をマルクス自身がすくなくとも基本的にはこのように考えていたと断定することができる、断定せざるをえな
い、ということであった。^(註)

(註) そしてまたこのことに附随して、「競争の現実の運動」、「産業循環」、「信用制度と世界市場における競争」といったこと
は「われわれの計画外」、「われわれの考察外」、「われわれの著作の計画外」であるといっていること、および、とはいえ、原
則としては考察外に置いている事柄であっても、叙述を完全にするために必要なかぎりでは、これらに触れ、組入れている場
合が——数多く——あること、および、「われわれの著作」の「続き」について、そういった「続き」を「万」書くことが
あればというように、書くことをほとんど放棄しているようにしか受取れない言い方をしていること、等々、こういうことを
見た。前にも記しておいたように、これらの点についてはのちにまた述べる。

なお、右の判断をするに当って挙げている文章は『資本論』第三部から採られたものであるから、その後に執筆し

た現行第一部、第二部当時にマルクスが同じ考えでいたかどうかはこれらをもってしては明かではなからう、といった疑問が生じるかもしれない。また、そこで挙げた第三部一三二頁では「信用制度と世界市場における競争」にかんする叙述を「計画外」といつているのであるが、とすれば第三部第五篇のなかでその一部で信用制度が論ぜられているのはどうしたことか、といった疑問もただちに生じうるであらう。したがって、記述がすこし前後することになるが、あらかじめかんとんにこれについて記しておく。

まず第一の点にたいして。これにはいろいろの方面から答えうる。たとえば、第三部八八五頁の文章は、さきに註を入れておいたように「神秘化的性格」が第一部以来いかに展開され、考察されて来たかという要約的説明につづいて書かれているのであるが、この要約的説明を見ても、当時すでに基本的には現行『資本論』の構成の構想が成っていたと見られる。また第一部出版後の一八六八年四月三十日付のエンゲルス宛の手紙を見ても——この手紙についてはのちに詳しく見るが、それは第三部の展開方法をエンゲルスに知らせているものである——、現行第三部執筆の一八六四—六五年当時とその頃との間に構想になんらの変化もなかったことを知りうるのである。

つぎに第二の点。原則としては考察外に置いている事柄であっても、叙述を完全にするために必要なかぎりではこれに触れ、組入れている場合が数多くあるが、その触れ、組入れている程度がつぎに問題になる。そして第三部第五篇のなかでの信用制度論は、この組入れが大きく行われているものと見られるべきであると考えられる。この信用制度論がかかる性質のものであることは第五篇のなかでのつぎのような記述からもこれを窺うことができよう。利子率を考察している第二十二章の冒頭、——「本章の対象は、——のちに取扱われるべき信用の諸現象も総じてそうであるが——、ここでは細目的には研究されえなから（*Kann hier nicht im einzelnen……*）」（Ⅲ三九一頁）。そして第

二十五章以下がこの「のちに」に当るのであるが、その冒頭でもまたつぎのように記している。「信用制度とそれがつくり出す諸要具（信用貨幣、等々）との立入った分析（die eingehende Analyse）」は、われわれの計画外に横わっている（liegt außerhalb unsers Planes）。ここではただ、資本制生産様式一般を性格づけるために必要な若干のわずかな点だけ（nur einige wenige Punkte）を取上げるべきである」（Ⅲ四三六頁）。つまり、信用制度にかんする考察は本来は計画外に属するのであるが、「資本制生産様式一般を性格づけるために必要な」かぎりでこれを扱う、といっているのである。なお、のちにやや詳しく見ることであるが、第五篇のなかでのこの信用制度論はプランの大きな変更と関連して組入れられたものと考えられる。

二

ところで、その叙述内容の性質が「資本制生産の内的構造のみを、いわばその理想的平均において」叙述するものであることは、著書『経済学批判』当時に構想していた「資本一般」にあってもまたそうであった——そこで叙述を予定していた諸々の事柄についての構想が『資本論』における程度に完成されていたかどうかは別問題として——、と見受けられる。つきに、このことを示す若干の文章を『経済学批判』のなかから挙げておこう。

たとえば、第二章の(2)「流通手段」のところでマルクスはつぎのように述べ——「商品が流通過程の内部でそれについてみずからを交換する金量は、交換によって規定されるのではなく、交換の方が、商品の価値によって、すなわち金で評価された商品の交換価値によって、規定されるのである」（インスティトゥート版、八〇頁）——、そこにつきのような註を附している。「このことはもちろん、諸商品の市場価格がそれらの価値の上または下に騰落しうること

を、妨げるものではない。しかしかかる顧慮は、簡単な流通には無関係であって、のちに考察されるべきまったく別の領域に属する。そこでわれわれは価値と市場価格との関係を研究するであろう」（傍点一三七）。

また、「流通手段および貨幣にかんする諸学説」のなかでヒュームの数量説を考察しているさい、金銀の価値変動が諸商品の価格に影響を与える過程について述べ、そこでつぎのような断り書を入れている。「かかる過程の展開は、一般に市場価格の動揺の内部において諸商品の交換価値が自己を貫徹する仕方様式（*die Art und Weise*）と同じように、ここには属しない」（一五七八頁、傍点一三七）。

著書『経済学批判』は、「資本」の章に先立って「商品」および「貨幣」を論じているだけであり、商品は簡単な商品生産関係において考察され、貨幣もまた「簡単な流通」において考察されている。したがってそこで取扱いを留保されている事柄であるからといって、ただちに「資本一般」のところでも取扱われないことにはならないであろう。そして右に挙げた文章においても、「簡単な流通」には属さないからここで考察しないといっているだけである。しかし内容的に、かかる「価値と市場価格との関係」は「資本一般」のところで取扱わず、「競争」のところに属すると考えていたであろうことは、たとえばつぎの記述と併せて見るならば明かであるといえよう。「交換価値の基礎の上にとそれとことなる市場価格がいかにして自らを展開するか、あるいはより正しくいえば、いかにして交換価値の法則はそれ自身の反対の形でのみみずからを実現するか、という問題……」。この問題は競争論において（*in der* *Lehre von der Konkurrenz*）解決される」（註）（五一頁）。

また信用については、たとえば「流通手段および貨幣にかんする諸学説」の終りのところでつぎのように記している。「最大の国民的規模での実験による、この銀行立法（一八四四年および一八四五年のインラグンド銀行条例）の

不名譽な失敗——理論的ならびに實際的——は、信用論において (in der Lehre vom Kredit) はじめて叙述される」(一八五頁)。

なおまた、著書『経済学批判』刊行の前年一八五八年四月二日付エンゲルス宛の手紙ではつぎのように記している。「資本一般」(この篇全体を通じて、労賃はつねにその最小限に等しい)と前提される。労賃そのものの運動とその最小限が騰落することとは、賃労働の考察に (in die Betrachtung der Lohnarbeit) 属する。さらに、土地所有はイコール零とおかれる。すなわち、特殊な経済関係としての土地所有 (das Grundeigentum als besondres ökonomisches Verhältnis) はここではまだ問題にならない。こういう進み方によつてのみ、つねにすべての関係のもつてすべてのことについて語るのを避けることが、可能である」(傍点—三三)。

以上、著書『経済学批判』当時の構想の「資本一般」の叙述内容の性質が「資本制生産の内的構造のみを、いわばその理想的平均において」叙述するものであったことを示すものとして二三の文章を挙げたのであるが、しかし、マルクスみずから、当時はこの「資本一般」の篇に続いて「競争」、「信用」の諸篇を書いてゆく予定であるといつていたのであるから、この点はもともとさして問題はないのである。

(だが、著書『経済学批判』において「第一篇、資本一般」での考察を留保している諸事項が『資本論』ではどうなっているか、ということを見るさい、右に挙げた記述は十分に顧みられねばならない。また、そこで考察を留保している事項についての、右の諸文章に見られるような取扱いは『資本論』の方では見られないということ、——かつ『資本論』ではそこでの考察事項に属さない事項について「計画外」というような取扱ひ方をしていること本稿(一)において附随的に見たところである——、は注意されねばならない。)

（註）『資本論』第三部第二篇は「利潤の平均利潤への転形」を論じているが、そこでマルクスは「相異なる生産諸部門における資本の構成の相違とその結果たる利潤率の相違」および「一般的利潤率（平均利潤率）の形成と商品価値の生産価格への転形」を二章を当てて説明したのち、補足的に三章を設け、その第一として「第十章、競争による一般的利潤率の均等化。市場価格と市場価値。超過利潤」と題する章を置いている。ここでは市場価格論を展開しようとしているのではなく、市場価値の性質を、したがってまた生産価格の性質を明らかにするために論述が行われているのであるが、そのなかで、なぜ「簡単な流通」の考察のさいに「価値と市場価格との関係」を論じる必要がないかについて、つぎのように述べている。「貨幣の考察にさいしては、諸商品はその価値どおりに販売されるものと仮定された。ただし、商品の貨幣への生成および貨幣から商品への再転形にさいして商品が通過する形態諸変化のみが問題であったので、価値から背離する諸価格を考察すべき理由はまったく存しなかったからである。商品がいやしくも販売され、そしてその代金をもつてもかく新たな商品が購買されるやいなや、形態転換全体が行われたのであって、商品の価格がその価値以下であるか以上であるかということは、それ自体として見た形態転換にとつてはどちらでもよいことである。基礎としての商品の価値はやはり重要である。ただし、貨幣はこの基礎からのみ概念的に展開されるのであり、また価格は、その一般的概念からすれば、まず第一には貨幣形態での価値にはかならぬからである」（Ⅲ二一九頁）。さらにまたつぎのように述べている。「需要供給は価値の市場価値への転形を前提し、また、需要供給が資本制の基礎上で行われるかぎりには、諸商品が資本の生産物であるかぎりには、需要供給は資本制生産過程を、したがって諸商品のたんなる売買とはまったくことなる錯雑した諸関係を、前提する。この諸関係にあつては、問題なのは、商品の価値の価格への形式的な転形、すなわちたんなる形態変化ではない。問題なのは、市場価格の市場価値からの、さらにまた生産価格からの、一定の量的背離である。簡単な売買にあつては、商品生産者たちそのものが互いに相対していることで十分である。需要供給は、一歩すすんで分析してみれば、(bei weiter Analyse) 種々の階級および階級部分——社会の総所得をその相互間で分配し、所得としてその相互間で消費するところの、したがって所得によつて形成される需要を形成するところの、種々の階級および階級部分——の存在を前提するのであり、また他方では、需要供給は、生産者たちそのものによつてその相互間で形成される需要供給を理解するためには、資本制生産過程の総姿容への洞見を必要とするのである」（Ⅲ二二二頁、傍点—三宅）。だから本著作では需要供給を、したがってまた市場価格の分析を展開しえないというわけである。同様なことをまたつぎのようにもいっている。「同じではなかったもののついでに述べておくが (Es sei hier ganz in Vorbei gehn

benark)、『社会的欲望』——すなわち需要の原則を規制するもの——は、本質的に、種々の階級相互間の關係によつて、またそれらの階級のそれぞれの經濟的なポジションによつて、したがつてことに、第一に勞賃にたいする總剰余価値の比率によつて、第二に剰余価値が分裂する種々の部分（利潤、利子、地代、租税、等々）間の比率によつて、制約されている。かくして、ここでもふたたび明かなように、その上で、需要供給の關係が演ぜられるところの基礎が展開されないうちには、この關係からしては絶対になにも説明されえないのである」（Ⅲ二〇七頁、傍点—三宅）。いわく、「この兩社会的推進力（需要と供給）の、より深い、ここでは適當でない分析はまったく度外視する」（Ⅲ二一五頁）。

このように「資本一般」——すなわち著書『経済学批判』当時立てられていたところの、第一部としてこれによつて「競争」「信用」「株式会社」の諸篇を書き、つづいて第二部「土地所有」、第三部「賃労働」から第六部「世界市場」にいたるといふ一連の著述構想下でのその第一部第一篇たる「資本一般」は、かんとんにいえば「現実の運動」を捨象しているといふ叙述内容の性質において、『資本論』と一致している、と見て差支えないであらう。あるいは『資本論』はその叙述内容のかかる性質において、その点かの「資本一般」と一致している。

だが、このことから『資本論』はかの「資本一般」に該当するものであり、『資本論』当時においても著書『経済学批判』当時のプランが根本的には変更されていかなかったとはただちにいいえない。その間においてマルクスはその著述プランを大きく変更していると見られるのであるが、そのことを論じてゆくに当つて、順序としてつぎに、著書『経済学批判』と『資本論』との中間に書かれている『剰余価値学説史』について見ておこう。

三

この『剰余価値学説史』——『剰余価値にかんする諸学説』——の原稿は、周知のように、著書『経済学批判』

（一八五九年一月脱稿）刊行後、その続きとして書いた原稿『経済学批判』——「一八六一年八月から一八六三年六月までに書かれた二十三冊からなる四折り版一四七二頁の『経済学批判』とい原稿」（『資本論』第二部へのエンゲルスの序言）——のうち、主要な部分をなしていたものである。「原稿の主体をなす部分である剰余価値にかんする諸学説と題する二二〇—一九七二頁（第六—第十五冊）」（同上序言）。しかしカウツキーによれば現行『剰余価値学説史』は原稿のこれ以外のところからも採録されている。——「私はたんに原稿の二二〇—一九七二頁だけでなく……一四七二頁の全体を調べて見た。私はエンゲルスが考えていた七五〇の原稿頁のほかに、数多くの覚書を見出した。それらは歴史的部分に利用すべきものであった、そして私はそれらを適当な箇所に入れた」（『剰余価値学説史』第一巻へのカウツキーの序文）。この編集方法は、今度のマ・エ・レ研究所による新版でも採られている。

なお、右の二十三冊のノートのうち、はじめの第一—第五冊（一一—二二〇「？」頁）とおわりの第十九—第二十三冊（一一五九—一四七二頁）とでは、『資本論』第一部で研究された諸テーマが、貨幣の資本への転化から結びにいたるまで、取扱われている」とされ、「剰余価値にかんする諸学説」につづく第十六—第十八冊（九七三—一一五八頁）では「資本と利潤、利潤率、商人資本および貨幣資本を、すなわちのちに第三部のための原稿中で展開されている諸題目を取扱っている」とされている（同上エンゲルスの序言）。つまり、一八六一年八月から第一部用の原稿を書きはじめ、第六冊目から学説史の部分に入り、このノートを十冊ほど書上げてのち、一八六二年秋頃から第三部用の原稿を三冊書き、転じて翌一八六三年一月からふたたび第一部用の原稿に筆を移している、ということになる（『第七冊は一八六二年十月および十一月と上書きされており、第十九冊は一八六三年一月と日附がしてある』——第三巻へのカウツキーの序文）。そしてこののち、「日附から見てこれに続く」とされているものは、ふたたび転じて第三部用

の原稿であつて、それは「すくなくとも大部分は一八六四年および一八六五年に書かれている」とされている（同上エンゲルスの序言）。すなわち現行第三部としてわれわれの前にあるものである。そして「これを本質的に完了したのちに、やっとマルクスは、第一部すなわち一八六七年に印刷された第一巻の仕上げにかかった」（同上序言）。原稿作成のかかる経路は、プラン変更と関連していると考えられるのであつて、そのことについてはのちにまた述べる。

さてこの『剰余価値学説史』の原稿は、本来は、「第一篇、資本の生産過程』の末尾に——「生産的労働にかんする諸学説」と並んで——置く原稿として書かれたものであつた。それがかかるものであつたことは、現行第三巻の序文のなかでカウツキーが紹介しているところの、ノートの後の方第十八冊中に記されていた「第一篇」のプラン（後述）から知ることができ、またカウツキーが、「ここから、原稿において（二二〇頁）『剰余価値にかんする諸学説』の連絡のとれた叙述がはじまる」という註を附しているジェームズ・スチュアートの項の冒頭の記述からも、すでにこれを窺うことができる。この文章はまた、『剰余価値学説史』においてマルクスが批判しようとした中心的課題をまず示しているものでもある。——「すべての経済学者は、剰余価値を純粹にかかるものとして考察しないで、利潤および地代なる特殊の諸形態において考察するという欠陥をともに犯している。このことかゝる必然的な理論的誤謬が発生せざるをえなかつたかは、さらに第三章——ここでは剰余価値が利潤としてとるところのきわめて転化した形態が分析される——において示されるであらう」（ディーツ版、第一巻、二九頁、改造社刊全集版訳、五三頁。以下『剰余価値学説史』からの引用はすべてディーツ版からであるから一々ディーツ版と断わらない、また邦訳箇所は改造社刊全集版の当該頁を挙げておくがたゞた訳とのみ記しておく）。

とはいへ、実際にはその考察は右の範囲に限定されてはならず、右でいっている「第三章」の範囲にわたっている

ことは現に見られるとおりであつて、マルクス自身またつぎのように述べている。——「リカドの批判においてわれわれは、かれ自身は区別しなかつたものを区別しなければならぬ。第一はかれの剰余価値の理論、——これは、かれにあつては剰余価値はそれの特殊の諸形態たる利潤、地代、利子と区別して確定されていないけれども、もちろんかれに存在している。第二はかれの利潤の理論。われわれはこの後者から始めよう。これはこの篇にはなく、第三篇への歴史的附録に (*in 'em historischen Anhang*) 属するのであるが」(第二卷第一分冊、九頁、訳、二三頁、傍点—三七)。このように考察が事実上第三篇の範囲にわたつてゐるのは、批判の対象である諸著作の内容において、剰余価値論と利潤論とが区別されていなく、したがつて批判においても密接に相関連していて切り離し難いことが、その一つの主たる理由であつたのであらう。(註)

(註) ここで「第三篇」といひ、ききに「第三章」といつてゐるものは、現行第三卷の序文のなかでカウツキーが紹介しているプランの「第三篇『資本と利潤』」であることはさうでもない。なお、第二の部分としては「資本の流通」を予定してゐた。たとえば、原稿二二二頁あたりのところであつたように述べてゐる、——「資本が労働過程の内部においてかかるものとして存してゐるところの、対象となる諸要素のこのような分析のほかに、重農主義者たちは、資本が流通においてゐる諸形態(固定資本、流動資本、——これらはまだはかの名称で呼ばれてゐるが——)を、また総じて資本の流通過程と再生産過程との間の関連を規定してゐる。このことは、流通にかんする章で立戻られるべきである」(第一卷、三四頁、訳、五八頁、傍点—三七)。また、「不変資本の再生産にかんする問題は明らかに、資本の再生産過程または流通過程の範に属する、だがこのとはここで主要点を解決しておくことを妨げるものではない」(同上、一八三頁、訳、二〇四頁、傍点—三七)。

このような、資本の生産過程、流通過程、資本と利潤という三つの区分は、すでに一八五八年三月十一日付ラッサール宛の手紙で第一分冊の内容を告げているさう、その三「資本一般」を「資本の生産過程、資本の流通過程、両者の統一、あるいは資本と利潤、利子」としてゐた構想であり (“Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie” のなかに採録されてゐる「一八五九年のプラン草案」ではこの三区分の當時考えられていた細目が示されてゐる)。ここで第三卷あるいは篇

とされているものは、著書『経済学批判』において第一部第一篇「資本一般」の第三章とされていた「第三章」に形の上で該当するものである。だが、形の上でもすでに「第三章」という形がそのままでは採られていないことは、一応注意されたい。なお右の「一八五九年のプラン草案」は、一八五九年一月に著書『経済学批判』を書き終えたのち、当時予定していた第三章「資本」にとりかかると当って、一八五七—八八年に書いた七冊のノート——マ・エ・レ研究所によって“Grundrisse……”と題して発表されたもの——を参照しつつ書かれたものであって、右「グリンドリッセ」への研究所の序言では「マルクスはこの配列を、つぎの大きな原稿〔つまり原稿『経済学批判』〕に携っていたさいに、導きの糸として利用した」（前付一四頁）と述べている。

このように『剰余価値学説史』の原稿においては考察が事実上「第三篇」の範囲にわたり、「資本一般」——その内容のなかには著書『経済学批判』当時の構想とちがって途中で地代論が「挿入」（一八六二年八月二日付エンゲルス宛の手紙）されることとなったが——を蔽う範囲の事柄が取扱われているが、しかし「競争」や「信用」に属する事柄については、つぎに見るように除かれている。そのこと自身にはあまり問題はありえないのであるが、若干の記述を掲げておこう。

（註）ただし、さきに著書『経済学批判』のなかから競争、信用を留保している記述を引用したさいに、その終りに括弧を附して記しておいたことが、この場合にも同じく注意されねばならない。

「われわれはここでは、生産に投せられるより以上に資本が蓄積される場合、たとえば貨幣の形態で銀行業者の手に休息しているような場合には、すこしも立入らない。したがって外国への貸付、等々、一言でいえば投資的投機には立入らない。同様にまた、生産された商品の大量を販売することが不可能である場合、すなわち恐慌、等々も考察しない。これらは競争の篇に属する。われわれはここでは、資本がその過程の諸局面において採る諸形態のみを研究すべきであり、そのさい、商品はその価値で売られると仮定する」（第二卷第二分冊、二五二—三頁、訳、二七一頁、傍点）

一三宅、傍点以下同じ）。この前の方は信用の問題である。

「われわれはここではただ、資本がその種々な前進的發展において通過する諸形態だけを考察すればよい。したがって、現実の（wirklich）生産過程がその内部で進行するところの現実の（reell）諸関係については展開されない。

商品はその価値で売られるということが、つねに前提される。諸資本の競争は考察されないし、信用制度も、社会の現実の（wirklich）構成も同じく考察されない。……とはいえ、われわれはすでに貨幣の考察にさいして、貨幣が総じて商品の自然形態とはことなる形態をとるかぎりにおいても、また支払手段としてのその形態においても、それがすでに恐慌の可能性を含んでいることを見出したのであるが、このことは「恐慌の可能性を含むということは」、資本の「一般的本性の考察にさいしては——現実の（wirklich）生産過程の一切の諸前提をなすところの、さらに進んだ現実の（reell）諸関係がなお展開されなくとも——より一層生じる」（同上、二六三—四頁、訳二八一—二頁）。ここで「資本の一般的本性の考察」といっているのは、資本一般の考察のことである。前に、すなわち『経済学批判』として刊行されたところで、貨幣の考察にさいして恐慌の可能性が見出されたが、資本一般の考察にさいしてはさらに恐慌の可能性がより一層見出される、といっているのである。

「商品流通において、さらに貨幣流通において發展する諸矛盾——それとともに恐慌の諸可能性——は、おのずから資本において再生産される、というのは、事実上、ただ資本の基礎の上のみ、發展した商品流通と貨幣流通が生じるからである。

しかしここでの問題は、潜在的恐慌のさらに一層の發展——現実の（reell）恐慌は資本制生産の現実の（reell）運動たる競争と信用とからのみ叙述されうる——を、その發展が資本の諸形態規定——資本としてのそれに「資本に」

独自のものであり、商品および貨幣としてのその「資本の」たんなる存在には含まれていないところの諸形態規定——から生じてくるかぎりにおいて、追跡することにある。資本のたんなる直接的生産過程は、それ自身ではここでなんら新しいものをつけ加えない。……事柄は、それ自身同時に再生産過程であるところの流通過程においてはじめて出現しうる。

ここでさらにつきのことを注意せねばならぬ。われわれは、完成せる資本 (das fertige Kapital) ——資本と利潤——を叙述する前に、流通過程または再生産過程を叙述しなければならぬ。というのは、われわれは、いかにして資本が生産するかということのみならず、いかにして資本が生産されるかということをも、叙述しなければならぬからである。しかし、現実の (wirklich) 運動は現存する資本から出発している、すなわち、現実の運動は、発展した、それ自身からはじまり、それ自身を前提とするところの資本制生産の基礎の上に行われる。それゆえ、再生産過程と、この過程のなかでさらに発展するところの恐慌の諸素質 (Anlage) とは、この項自体の下では不完全にしか叙述されないのであつて、「資本と利潤」の章においてその補足を必要とする。

資本の総流通過程または総再生産過程は、資本の生産局面と流通局面との統一であり、自己の諸局面としての二つの過程を通過するところの過程である。このなかに恐慌のさらに一層発展した可能性または抽象的形態が横わっている (同上、二八六―七頁、訳、三〇五―六頁)。ここで、「現実の運動は現存する資本から出発している、すなわち、現実の運動は、発展した、それ自身からはじまり、それ自身を前提とするところの資本制生産の基礎の上で行われる」からとして、資本の流通過程、再生産過程において現われる恐慌の「素質」は「資本と利潤」のところで補足されねばならぬといっているが、この「資本と利潤」のところではいまだ資本の「現実の運動」そのものを、したが

って「現実の恐慌」を叙述するものではない。さきに第三部冒頭で第一部、第二部の研究対象と第三部のそれとのつながりを説明している記述について記したところ（前号、七九―八〇頁）を参照されたい。また、現行第三部は「資本制生産の総過程」と名づけられているが、右で「資本の総流通過程または総再生産過程」といつているのは「第二篇」（当時の）での研究対象を指しているのであって、「この項」つまりこの第二篇自体の下では「再生産過程」は不完全にしか叙述されないから、「第三篇」においてその補足を必要とする、——という関係にある。なお、当時現行第二部第三篇に当る部分がどのような形で構想されていたかは、右の「不完全」ということは直接には関係がないことであるが、後掲「第三篇」のプランの(四)「資本制生産の総過程における貨幣の諸還流運動」なる項目との関係において、一つの問題たるものと考えられる。

「恐慌が、商品の価値変動と一致しないところの価格変動および価格革命から生じるかぎり、それはもちろん、商品の価値と一致する価格が前提されている資本一般の考察にさいしては展開されえない」（同上、二八九頁、訳、三〇八頁、既掲）。

「以上のほかになお、恐慌の諸モメント、諸条件、諸可能性の多くがあるが、これらは具体的な諸関係、ことに諸資本の競争と信用との考察にさいしてはじめて考察されうる」（同上、三一六―七頁、訳、三三七頁）。

右に引用した大小五つの文章は、いずれも、第二巻第二分冊でリカッドについて論じているなかの「資本の蓄積と恐慌」という見出しをカウツキーが附している部分から採ったものであるが、第三巻の方ではまた、たとえばつぎのように述べている。

「私はここでは、私の歴史的概観からシスモンディを除外する。^(註) というのは、かれの見解の批判は、私がこの著述

の、の、に (nach dieser Schrift) はじめて取扱はうる部分、すなわち資本の現実の (real) 運動(競争および信用)に属するからである」(第三卷、五二頁、訳、六六頁)。「一般的利潤率を照応するものは、もちろん一般的利子率または一般的利子歩合である。これを進んで展開することは、ここではわれわれの意図ではない。というのは、利子生み資本の分析は、この「一般篇」(diese n allgemeinen Abschnitt)に属するのではなく、信用にかんする篇に属するからである」(同上、五三三―四頁、訳、五二六頁)。ここでは当面執筆しているものを「この著述」といい、その執筆範囲を「この一般篇」と明示している。またさらに「競争の篇」と記していたが、ここでも「信用にかんする篇」といっていることに注意されたい。

以上見られるように、「資本の現実の運動」たる競争、信用にたいしては、第二の部分たる資本の流通過程、第三の部分たる資本と利潤の項に論及していると同様な取扱いはなさず、これらとは區別して——当面の著述にかんするかぎりは——考察外においているのである。

(註) シスモンディの批判は「資本の現実の運動」のところに属するといっているのは、シスモンディ批判においては、かれの眼に資本制生産の矛盾——過剰生産がいかに映じているかを批判することが主たる問題であったからである。なおその後書かれた「第三篇」のプランの(7)では「利潤についての諸学説。シスモンディおよびマルサスを剰余価値についての諸学説のなかにも取入れるべきでないかどうかの問題」と記している。シスモンディにかんしていえば、第一―第三篇にたいする「歴史的概観」からまづたく「除外」してしまふことが妥当かどうかを、再考中であつたのであろう。

四

ここで、『剰余価値学説史』第三卷の序文のなかでカウツキーが紹介しているところの「第一篇」のプランと「第三

篇」のプランとについて、若干の考察を差挿んでおこう（挿入的なものであるが、そのなかでの諸考察は後述するところにつながる）。
 この両プランはノート第十八冊中に記されていたとされており、カウツキーは一八六二年十二月のものと考証している（同上序文、八一九頁、訳、二二—三頁）。

（註）しかし、ヴェ・ブルシリンスキー、イー・ブレイス「K・マルクス『剰余価値学説史』科学版の準備について」（『経済諸問題』誌、一九五〇年第九号所載論文、寺村鉄三訳、大阪商大『経済学雑誌』第二十五卷第四号）では、一八六三年一月と記している。“Grundrisse”に附されているマ・エ・レ研究所の序言（一九三九年）でも同様である（同書前付一〇頁）。しかしいづれもその理由を示していない。したがってしばらくカウツキー説をとるはかないであろう。カウツキーは、第十八冊には日附がないため、その前後の第十七冊、第十九冊にそれぞれ一八六二年十月および十一月、一八六三年一月と記されていることから、第十八冊の執筆時期を一八六二年十二月と見ている。ふたたび現行第一部の原稿に筆を移したところのノート第九冊が一八六三年一月と日附がしてあることは、のちに見る一八六二年十二月二十八日付クーゲルマン宛の手紙で「原稿の清書を私は一八六三年一月をもってはじめる」と記していることも符号するのであるが、おそらく、ノート第十八冊（二〇六—二一五七頁）は一八六二年十二月から翌年一月にかけて書かれたのであろうか。そしてプランの所在が一三九、一一四〇とノートの比較のおわりの方であることから、研究所は六三年一月に書かれたと認めたのではないかと考えられる。同研究所で一九三一年に「直接的生産過程の諸結果」を発表したさいには、まだ右プランを六二年十二月末のものとしていた。「第三篇」の「第二章」についてのかかなり詳細なプランもカウツキーによって同じところで紹介されているが、これはもともと前の一一〇九頁にある。十二月であっても一月であってもいづれにしても大した事柄ではないが、右のクーゲルマン宛の手紙との先後を問題とし、手紙を書いたのちにプランを変更してノートに書きつけたのだと見ようとする向きもあるので、——この手紙でいつていることと右プランとの間にはなんら喰違うところがないので、かかる見解はもともと問題にならないのであるが——、一言註記しておいた次第である。

「第一篇」のプランはつぎのごときものである。——「第一篇、資本の生産過程はつぎのように区分されるべきで

ある。(1)。序説。商品、貨幣。(2)。貨幣の資本への転化。(3)。絶対的剰余価値。(a)。労働過程と価値増殖過程。(b)。不変資本と可変資本。(c)。絶対的剰余価値。(d)。標準労働日のための闘争。(e)。同時の労働日(同時に就業する労働者の数)。剰余価値の額と剰余価値の率(大きさと高さ)。(4)。相対的剰余価値。(a)。単純協業。(b)。分業。(c)。機械、等々。(5)。絶対的および相対的剰余価値の結合。賃労働と剰余価値との間の比率(割合)。資本のもとへの労働の形式のおよび現実的包摂。^(註)生産的および不生産的労働。(6)。剰余価値の資本への再転化。本源的蓄積。ウェークフィールドの植民地論。(7)。生産過程の結果。(6)か(7)の項下で取得法則(Law of appropriation)の現われにおける変化が叙述される。(8)。剰余価値にかんする諸学説。(9)。生産的労働にかんする諸学説。」

(註) reale Substitution. 『資本論』第一部第五篇第十四章「絶対的および相対的剰余価値」のところでは real となっているが同じである。マルクスは real, reell, wirklich をほとんど区別なく用いているのであって——前掲の『剰余価値学説史』からの引用にも見られるように——、いずれも現実的と訳しておく。

見られるようにここでは、「剰余価値にかんする諸学説」は「生産的労働にかんする諸学説」と並んで、「第一篇」のおわりに入れるというプランが示されている。そしてかかるプランがノート第十八冊中に記してあったことから、つぎのことがわかることができる。すなわち、現に『剰余価値学説史』として見られる形のもの的大部分を書いたのちにおいても、また、そのなかで説き及んでいる他の篇に属すべき学説史的考察から抜き出して(「第三篇」のプラン参照)第一篇のなかに「剰余価値にかんする諸学説」をかかるとして入れる——しかも「生産的労働」にかんする諸学説とも区別して——というプランを持っていたことである。このときにいたっても、この点は執筆のはじめに採っていたプランを動かしてはいなかったのである。このことはかなり注目を要することである。

カウツキーはこのプランと『資本論』第一巻とを比較して、「『取得法則の現われにおける変化』のもとには、明かに、収奪者の収奪という事に帰着する『資本制蓄積の歴史的傾向』としてマルクスが第一巻で展開したところの思想の進行が理解されるべきである」（同上序文、九頁、訳、一三頁）と述べている。かれは右のプランと第一巻の内容目次とが「ほとんど完全に一致する」といわんとしてこのようにいつているのであるが、そしてプランには「資本制蓄積の一般的法則」が項目として欠けているがこの章は「資本制蓄積の歴史的傾向」に連繫しているところからプランで「取得法則」云々といっていることがそれに該当するのだと考えたのであろうかと思われるが、このカウツキーの判断は妥当でないであろう。マルクスが「(6)か(7)の項下で取得法則の現われにおける変化が叙述されうる」といつているその叙述は、『資本論』では、第二十二章「剰余価値の資本への転化」の第一節で「商品生産上の所有法則の資本制的取得法則への変化」としてとくに与えられているのであって、プランに「資本制蓄積の一般的法則」の項が欠けていることはまた別に考えられねばならない。そしてこの項が欠けていることは、そのことについてはカウツキーは黙っているところの(7)「生産過程の結果」の項が『資本論』に欠けていることと関連があると考えられる（後述）。

またカウツキーは、「しかしなぜマルクスが、はじめた意図したように生産的労働を第一巻で取扱うことを、やめたのか？ それを『資本』一般の研究範囲から除外しようとしたのだとは受取れない。かくするにはそれはあまりに重要すぎる。だが、これを第一巻から遠ざけて、どこにかれは持込もうと考えたのか？ この点について、われわれは悲しいかなにもいうことができない。われわれは確答を与えるべきすこしの手がかりもまたない」（同上、九一—〇頁、訳、一三—四頁）と述べている。カウツキーがここでいつているのは、右プランの(5)の「生産的および不生産的

「労働」のことと思われるが、『資本論』第一部にはかかる項目は項目としては存しないとはいえ、これまたカウツキーのようにいうことはできないであろう。第五篇「絶対的および相対的剰余価値の生産」の冒頭の章たる第十四章「絶対的および相対的剰余価値」においては、叙述はまず、まさに生産的労働について要約的な説明を与えることから始められているのである。そしてそこではまたつぎのように、第四部「学説史」において生産的労働の問題を詳しく学説史的に取扱うことを予告している。——「学説史を取扱うところの本著述第四部において、古典派経済学は昔から剰余価値の生産を生産的労働者の決定的性格ならしめた、ということが詳しく見られるであろう。したがって、剰余価値の本性をかれらがどう解釈するかに応じて、生産的労働者についてのかれらの定義が変わってくるのである」(一五三四頁)。

さて右のプランを『資本論』第一部の篇別とさらに較べて見ると、プランの(1)―(5)と第一部の第一篇―第五篇との間にはほとんど差異がないが、^(註)第六篇の「労賃」がプランの項目にはない。またプランの(6)と第七篇「資本の蓄積過程」とは一見ほぼ同じようであるが、とくに第二十三章「資本制蓄積の一般的法則」——この章は第七篇全体の約半分の分量を占めている——がプランの項目には欠けている。他方、プランの(7)「生産過程の結果」の項目は『資本論』にない。ただ外見上比較すると以上のことが目につくのであるが、これらの点をすこし立入って見て見よう。

(註) 差異がないといっても項目についてのことであって、叙述内容にかんしては、たとえば一八六六年二月十日付エンゲルス宛の手紙のなかでつぎのように述べている、——「今度は皮膚にやってきた〔疔の再発のこと〕。……僕にとってもっとも嫌だったのは、肝臓病が消去した一月一日以来素適に進んでいた僕の仕事が、中断することだった〔マルクスは一月一日からいよいよ『資本論』の清書、成文にとりかかっていた、同年二月十三日付エンゲルス宛の手紙参照〕。」「腰掛けること」などはもちろん問題にならなかつた。いまだにそれで困っている。しかし横になりながら——一日のうち短い合間々々ではあるが——仕事を続けている。本来の理論的部分は続行することができなかった。それには頭脳があまりに弱っていた。それゆえ、僕

は、「労働日」にかんする篇を、歴史的に扱ひた、このことは僕の最初のプランのなかにはなかつたのだが、いま僕によつて「挿入された」ものは、君の本「『イギリスにおける労働者階級の狀態』、一八四五年」にたいする一八六五年までの補足（スケッチ風な）をなすものであり（そのことを僕は註でもいつている（第三篇の註四八参照）……）（傍点およびハ）内三七。マルクスはこのあとで「工場検査官報告書」、「児童雇傭委員会報告書」、「公衆衛生報告書」を推賞しているが、第一巻第一版の序言でもその資料としての確かさを認めているこれら三つのブルー・ブックが「労働日」以下巻末にいたる諸章で大いに利用されていること、そしてそれらのうちの多くが右プラン以後に刊行されたものであること、ただこういうことだけを見ても、『資本論』では問題の取扱ひ方において資料的にいちじるしく拡充されることとなつたであらうことは、推測に難くない。

まず第一の点についてであるが、ここではなにゆえ「労働日」がこの「第一篇」のプランの項目では欠けているか、またなにゆえ『資本論』の方では「労働日」の篇が設けられているか、こういうことが明かにされねばならない。

ここでははじめに顧慮する要があるのは、『資本論』第一巻の第二版以下では、初版において「章」別になつていたのが「篇」別に改められたが、そのさい第五章（これは「絶対的および相対的剰余価値の生産にかんするより立入った研究」と題されていた）は二つの篇に分けられた、ということである。このこと自体は周知のことであるが、この場合忘れられてはならないことである。すなわち、現行版の「第六篇、労働日」は初版では第五章のなかに含まれていて、こういった表題の独立の篇とはなつていなかったわけである。（なおこの変更は篇別にかんしてのみであつて、内容にかんしては、第二版への跋で第二版でなした本文中での「もっとも重要な」変更について告げられているなかでもにも触れていないので、初版も第二版ともに未見であるが、すくなくとも大きな変更はなかつたと見られる）。

右のことは問題を解く上に重要な示唆を与える。だが、このことだけで問題がすべて片附いてしまうことにはならない。つぎに、右の「第一篇」のプランの(5)でそのなかで「賃労働と剰余価値との間の比率（割合）」という項を掲げているが、これは『資本論』ではどのように取扱われているか、ということを調べる必要がある。

『資本論』では「賃労働と剰余価値との間の比率」の考察はつぎのように進められている。さき第五篇第十五章において、この問題は労働力の価値または価格と剰余価値との間という「本質的形態」で考察され、ついで第十六章で剰余価値率を表わす種々の範式、とくに古典学派に見られるその「派生的な範式」について述べている。ついで第十七章において——ここから現行第六篇となる——、右の労働力の価値または価格が賃賃という形態で現象することを説き、「賃労働にあつては剰余労働または不払労働でさえも支払労働として現象する」（I五六五頁）ことを明かにする。このように第十七章は、さきに労働力価値と剰余価値との間の比率という本質的形態において考察したところの、その労働力の価値の現象形態の説明という順序に立っているのである。

第十七章では賃賃が現象形態であることが一般的に論ぜられ、ついで第十八章、第十九章においては、その賃賃のたる形態——賃賃が実際に支払われる形——たる時間賃銀と個数賃銀とについて考察されているのであるが、この第十八章のはじめにマルクスはつぎのように記している、——「第十五章で叙述された労働力の価格と剰余価値との大きさの変動にかんする諸法則は、かんたんな形態変更によって賃賃の諸法則に転化される」、とはいへ「本質的形態においてすでに展開したことを現象形態においてくり返すことは無用であろう。したがってわれわれは、時間賃銀を性格づける少数の点のみに限定する」（I五六八頁）。ここでさきの問題の考察の展開としてはやや横道にはずれて来ているのである。ついで末尾の章として「賃賃の国民的相違」が置かれている。この章は以前の方の部分とつぎのような関連に立っている、——「第十五章でわれわれは、……すでに述べたように、労働力の価値または価格を賃賃という公開的な形態にたんに翻譯するだけで、右のすべての法則は賃賃の運動の法則に転化される。この運動の内部で組合せの変動として現象することが、相異なる諸国にとっては諸々の国民的賃賃の同時的相違として現象しうる」

（註一）
（一五六頁）。

「賃労働と剰余価値との間の比率」という問題は『資本論』ではこのような考察順序で展開されているのであって、この視点から見れば第十五——第二十章は多かれ少なかれ一体的有機的な関連と順序とをもっているのである。そしてとくに、第十七章での賃労働なる形態についての一般論は、右のプランにないもので『資本論』において突如としてここに挿入されたものだ、というようにかんたんに見ることはできないことが注意されねばならない。（註二）

（註一）「八六三年の五月に書かれたノート第二十二冊」のなかでは、「絶対的剰余価値および相対的剰余価値、時間賃銀および個数賃銀、剰余価値の資本への再転化といった理論的諸研究」が行われていたとされている（前掲大阪商大『経済学雑誌』所載邦訳、一一四頁、傍点—三宅）。またこれらのノートののちに書かれた「直接的生産過程の諸結果」末尾の「断稿」（これはどういうわけか改造社刊『全集』補巻の向坂氏訳にはあるが他の二訳本——後述——には附されていない）のなかでは個数賃銀について述べ、「賃銀がどんなふうに移渡されるかという仕方は賃銀の性質を変えるものではない、ということとは絶対に明瞭しておかねばならない」とし、「個数賃銀は時間賃銀の特定の形態にはかならない」と述べている（『全集』訳、二九五、二九八頁）。またその「諸結果」の本文のなかでつぎのように述べているところがある、——「すでに示したように、個数賃銀は資本と労働との間の、剰余労働と必要労働との間の一般的関係をすこしも変化させないにもかかわらず、個々の労働者にとっては」云々（『選集』訳、四三三頁）。これは、個数賃銀といった賃労働の形態を論じていたこともプランの「賃労働と剰余価値との間の比率」の考察の展開とこのような関連にあった、という当時のマルクスの意図を窺わしめる。また右の「断稿」のなかでは賃労働の国民的相違についての興味ある記述がなされているが、そのさい時間賃銀での比較と同時にそれを個数賃銀で表現してみなければならぬとし、「かくすることによってではじめて、必要労働と剰余労働との間の、または賃労働と剰余価値との間の真実の比率がえられる」（『全集』訳、二九八頁）と述べている。以上補註として。

（註二）著書『経済学批判』の「商品の分析のための歴史的事項」の末尾で従来のリカード批判にかんして四つの点を挙げ、それぞれ、「賃労働論がこれに答を与える」、「この問題を、われわれは、資本を考察するさいに解決する」、「この問題は競争論において解決される」（既出）、「この問題は地代論において解決される」と記している。ここで「資本を考察するさい」とい

っているのは、当時の「第一部、資本について、第一篇、資本一般」において予定していた「第三章、資本」を指すものとも
られねばならない。そして『資本論』の第十七章「労働力の価値または価格の労賃への転形」のなかでマルクスはこの問題に
解決を与え、同時に『経済学批判』においてこの解決を予告しておいたということを註記している、——第六篇註二七（なお
第六篇は上記のように後から独立の篇とされたため、註の番号は第五篇からの通し番号のままになっている）。このことによ
っても、すでに著書『経済学批判』当時に、労賃という転化形態について「資本一般」の篇で叙述することを予定していたこ
と、そしてそれがこの第十七章で果たされていることを知ることができよう。

また、第十七章で述べている労賃という形態の説明は、第三部での費用価格の説明とともに、『剰余価値学説史』第三卷第
七篇で土地—地代、資本—利子、労働—労賃という範式を論じていることと結びついており、この範式を論じる前提をなして
いる。等々というように、労賃の説明が『資本論』ではじめて挿入されることとなったものでないということは、諸々の点か
ら確認することができる。

プランの(5)の「賃労働と剰余価値との間の比率」の考察が『資本論』では第十五—第二十章にわたって展開されて
いると見るならば、初版での「第五章」はプランの(5)に——叙述としては各項において精粗のちがいがあったであろ
うが——該当していることになる（「資本のもとへの労働の形式的および現実的包摂」と「生産的および不生産的勞
働」は第十四章に二応概説的に入れられていると見ることができよう）。では、なにゆえ『資本論』では第二版で「賃
賃」を独立した篇にするという改訂が行われたのであろうか。一八六七年六月二十六日付エンゲルスのマルクス宛の
手紙およびその翌日付マルクスのエンゲルス宛の手紙は、この間の消息について一つの手がかりを与えるものと思わ
れる。それは、『資本論』のはじめの方の部分を校正刷で読んでいたエンゲルスが、剰余価値の発生を説明するさい
労賃という形態についての説明を加えておいた方が工合がいいという注意をしていることには、マルクスが、
かかる現象形態は第三部において叙述されうるのだが、あらかじめ労働力の価値の労賃への転形は「第五章」で述べ

ている、といった返事をしていっているものである。第二版でこの「第五卷」を二分して「労賃」を独立の篇にしたのは、叙述形式にかんする他の諸点についてのエンゲルスの注意もよく斟酌したようにこの点についても注意を斟酌して、見出しを見ではっきり分るようにしたのではなからうか。独立化に当たってこうした事情も与っていたと推測される。

そしてまた、第十五—第二十章が「賃労働と剰余価値との間の比率」の考察として有機的関連をもっているとしても、同時にそのなかで労賃なる形態についての基本的な考察が行われ、その展開を同時に含むにいたっていることは、第十七—第二十章に見られるとおりである。第十七章で労賃形態の一般論が与えられることとなり、これにつづいて第十八、第十九章で時間賃銀、個数賃銀を論じているが、この両章での論じ方は既述のように「賃労働と剰余価値との間の比率」の考察としては補足的なものである。だが他方マルクスはここで労賃をこのように論じていることにたいしてつぎのような大きな意義を認めている。——マルクスは『資本論』第一巻刊行後、一八六八年一月八日付エンゲルス宛の手紙で、「この本の根本的にあたらしい三つの要素」として、剰余価値を一般的形態において取扱ったこと、労働が二重性格をもっていることを明かにしたことと並べて、第三に「はじめての労賃が、その背後に隠されている諸関係の不合理な現象形態として叙述され、かつこのことが正確に、労賃の二つの形態である時間賃銀と個数賃銀とについて叙述されていること」（傍点—三宅）を挙げている。ただ、こういうことから見ても、マルクスにおいてこれらは行論上のたんなる補足と看做されていない、ということが窺われる。そしてかかるものであったからこそ、それらはまた第二版において第十七章以下が切離されて相合して「労賃」として独立の篇に仕立てられることとなった、——さきの問題はこのように考えられるのである。

なお附言すると、このように『資本論』にいたる間に問題の展開の仕方として若干の差異が生じていると見られる

のであるが、このことはまた第十八章のはじめに、労賃のとする諸形態のすべてを叙述することは「賃労働にかんする特殊理論」(die spezielle Lehre von der Lohnarbeit)に属し、この著作には属しない。とはいえ、二つの支配的な基本形態は、ここでかんたんに展開されるべきである」(一五★八頁、傍点—三宅)といっていることも関連があると思われることができよう。『資本論』においては『資本論』四部作をもってそれ自体で完結した基礎理論を与えようとし、著述プランとしては後続篇の執筆を予定していないということについてはのちに述べるところであるが、右で「賃労働にかんする特殊理論」といい、「この著作には属しない」といっていることは、著書『経済学批判』当時の、「資本」(註一)「土地所有」「賃労働」と相次いで書いてゆくプランを変更していることを窺わしめる一例と見ることができ。そしてこういうことも与って、賃賃についての叙述をややより詳しく与えたのではなからうか、とも考えることができる。(といっても、逆に、賃賃についてのやや詳しく叙述がここにあることをもって、「賃労働」のプラン変更の積極的論拠たらしめることは、前述のことから見られるように、適当でない。まして「賃賃」をあらたに附加されたものと見ることは誤っている)。

右のことはまたつぎのこととも関係をもっているように見受けられる。この第六篇でも賃賃の形態について若干の考察をしているのみであって、賃賃の騰落¹⁾、運動²⁾自体についてはこれを考察外としている。たとえば第十五章のはじめにおいて、「われわれは……労働力の価格は、時としてその価値以上に騰貴することはあっても、その価値以下に下落することはけつしてない、と前提する」(一五四四頁)と断っている。この点著書『経済学批判』当時のプランはすこしも動かされていないのである。——「賃賃そのものの運動とその最小限が騰落することは、賃労働の考察に属する」(前掲一八五八年四月二日付エンゲルス宛の手紙)。だが、理論の本筋としてはそうであるが、この賃賃の運

動自体の問題でも、叙述を完全にするために必要なかぎりでは、諸所で触れられている。

たとえば第十八章「時間賃銀」のなかで労働時間の延長と労働の価格との関係について述べているさい、「過度な労働時間のもとでの哀れな労賃」が生じることにかんする労働者たちの間での競争と資本家たちの間での競争について記し、そして「われわれはこの運動をただ示唆するにとどめる、というのは競争の分析はここでの問題に属さないからである」としつつ、「*「はいえ、しばらく（für einen Augenblick）資本家自身をして語らしめよう」*」（一五七五頁）としている。また第七篇第二十二章第四節では「剰余価値の資本および所得への比率的分割から独立して蓄積の大きさを規定する諸事情」を概括しているが、第一の労働の搾取度の考察に当たってつぎのようにいっている、——

「剰余価値の生産にかんする諸篇では、労賃はすくなくとも労働力の価値に等しいということが、たえず前提されていた。だが実際の運動においては、労賃のこの価値以下への暴力的な引下げがあまりにも重要な役割を演じているので、*「しばらく（einan Augenblick）この問題を論ぜざるをえない」*」（一六三〇頁）。（なお、第四篇第十三章第七節での「綿業恐慌」のところでも、これと同様に、「綿花飢饉の歴史はあまりに特徴的であるので、しばらくこの問題を論ぜざるをえない」（一四七九頁）といっていることを想起されたい）。また第二十三章「資本制蓄積の一般的法則」のところでは主題の性質上かなり包括的な叙述が与えられているが、とくに産業予備軍と労働の需給について論及し、「概していえば、労賃の一般的諸運動は、もっぱら、産業循環の週期的変動に照応する産業予備軍の膨脹と収縮とによって規制されている」（一六七二頁）といった説明を与えていることは注目すべきである。既述のように、この産業循環自身も原則として考察外に置かれている事柄である。また第三部第三篇利潤率低落の法則を述べるさいは、「反対に作用する諸原因」について論及するために一章を設け、その一つとして「労働力の価値以下への労賃の引下げ」

を挙げている(Ⅱ二六三頁)。以上は心当りの箇所を挙げたにすぎないが、こういった叙述を与えていることもまた、後続篇の執筆予定をとり止めていることと関連があると考えられるのである。(註二)

(註一) 「直接的生産過程の諸結果」のなかでは、たとえば、従来その報酬が不定であった自由職業家たちの活動の価格が資本制社会では賃労働の価格を規制する法則にしたがうようになるとし、かかる点は「賃労働と労賃にかんする特別の研究」で取扱われるべきであるとしている(「選集」訳、四四四頁)。またサーヴィスとして使用されるだけで生産物には転化されえないが、しかも直接に資本制的に搾取される労働(たとえば歌手)については「賃労働を考察するさいに」取扱われるべきであるといっている(同上訳、四四七—八頁)。これらは「諸結果」のなかの「生産的労働と不生産的労働」の項下の記述であるが、『剰余価値学説史』第一巻の「B」の附録「生産的労働の概念」のなかでも右のことについて述べ、それぞれ「当面の關係にかんする研究とはなんの關係もないのであって、労賃についての章に属する問題」、「労賃にかんする論議において考察されるべきであって、現在の研究にとってはまったくどうでもよい問題」としている(四一九—二〇頁、訳、四四—二頁)。また「諸結果」の末尾の「断章」のなかではつぎのように述べている、「その総価値が労働能力(のちの用語での労働力と同じ)の価値をなす生活欲望そのものの水準が上ったり、下ったりすることもありうる。だが、この動揺の分析はこの任務ではなく、労賃の理論に属する。労働者の欲望の水準が高く仮定されようと低く仮定されようと、そんなことは資本の分析にとつてはまったく無關係である……。しかし、理論におけると同じく、また実際においても、与えられた大きさとしての労働能力の価値から出発されなければならない」(『全集』訳、二八八頁、傍点—三宅)。これらの記述は、労賃の研究の進め方をマルクスがどう考えていたかの一斑を窺わしめるが、当面の点にかんしていうと、右で「労賃についての章」「賃労働を考察するさい」「労賃の理論」といっているのはすべて同じことであり、そして『資本論』で「賃労働にかんする特殊理論」といっているのもそれに該当することは明らかであろう。また『剰余価値学説史』では——「生産的労働の概念」の執筆はさきの「第一篇」のプランの後——「労賃についての章」というように、また著述プランのうちの一部分であることを窺わしめる記述をしているのにならして、『資本論』の方では——はずすに「諸結果」でもそうなっている——このように記していないこと(つぎの註二に掲載の文章でも同様)に注意されたい。

(註二) 『剰余価値学説史』のなかでは賃労働の騰落運動についてつぎのように記しているところがある、——「労賃の騰落は

「労働力の」需要供給の変動の結果であることがあるし、または（奢侈品とくらべて）必要な生活資料の価格の一次的な騰落の結果であることがある、——そしてこの生活資料の価格の変動自身がまた、「労働力の」需要供給の変動とそれによって条件づけられる労働の騰落とによって起りうる。労働のこのような騰落が利潤率の騰落を伴うかぎりでは、このことは利潤率の騰落の一般的法則とは関係がないこと、商品の市場価格の騰落一般がその価値決定と関係がないのと同様である、こういうことは労働の現実の運動についての章で考察するべきことである。需要供給の関係が労働者たちにとって有利であれば、かれらの労働は上り、かくして、これに伴って一時的にある種の必要生活資料、とくに食料品の価格が上るといふことはありうる（けっして必然的ではないが）（第三卷、三七二頁、訳、三六九頁、傍点—三宅）。『資本論』では上の本文に掲げたところでも労働の引下げについて「競争の分析」に属するといっているが、第三部の上記の箇所でも、労働力の価値以下への労働の引下げについて、「これは、ここではただ経験的事実として挙げるにとどめる。けだし、これは事実上、ここに挙げるべき他の若干の事柄と同様に、資本の一般的分析とはなんの関係もないのであって、この著作では取扱われない競争の叙述に属するからである」（Ⅱ二六三頁、傍点—三宅）といっている。「賃労働にかんする特殊理論」に属するということと「競争」の問題だということとは、同じではない。この点『資本論』でいっている「競争」の問題の範囲を考えると、また著書『経済学批判』「当時の上記のプラン——労働の騰落運動は「賃労働の考察に属する」といふ——との関係において、注意を要する。

さきの第一の点——第六篇の「労働」がプランの項目にないという——についての考察は以上にとどめ、つきにさきの第二の点、すなわち、プランの(6)と第七篇「資本の蓄積過程」との比較、およびプランの(7)が『資本論』の項目にないこと、について見よう。くり返して「第一篇」のプランを記しておく、(6)。剰余価値の資本への再転化。本源的蓄積。ウェークフィールドの植民地論。(7)。生産過程の結果。(6)か(7)の項下で取得法則の現われにおける変化が叙述されうる」。他方、『資本論』の第一部第七篇「資本の蓄積過程」は、——まず第二部、第三部での叙述との関係について一言し、ここでは蓄積を「直接的生産過程のたんなる契機として」考察するという前書きを附して——、第二十一—第二十五章で「単純再生産」「剰余価値の資本への転化」「資本制蓄積の一般的法則」「いわゆる本源的蓄

積「近代植民論」がそれぞれ論ぜられている。

プランの「生産過程の結果」に該当する原稿、「直接的生産過程の諸結果」^(註)は、一九三一年にマルクス・エンゲルス・レーニン研究所によって見出され、「マルクス・エンゲルス・アルヒーフ」にその全文が発表されたが、プランと『資本論』との比較をするにはまずこの原稿の内容を調べて見なければならぬ。そしてプランの(6)と第七篇との間の差異はいかなる理由によるか、ということをも明かにする光源の一つがここにあるのである。

(註) この原稿は「第一巻、資本の生産過程、第六篇、直接的生産過程の諸結果」と題されていたとされている。邦訳は、改造社刊マルクス・エンゲルス全集補巻の一(向坂逸郎氏訳、昭和十年。このなかには前述のように他の二訳本にない「断章」が附されている)、研進社刊『マルクス資本論遺稿、直接的生産過程の諸結果』(淡徳三郎氏訳、昭和二十四年。これは昭和八年、ナウカ社刊『資本論』研究——マルクス記念論集——)第一輯、第二輯に分けて収めてあったものを併せたもの。なおこの第一、第二輯には遺稿発表にさいしてアルヒーフ序文として書かれたとされているアー・レオンチェフの論文「マルクスの未発表原稿について」が分けて訳出されていたが、研進社刊にはこれを「解題」として収録してある、大月書店刊『マルクス・エンゲルス選集』第九巻下(昭和二十五年)などがある。原文は未見であるので、本稿での引用は訳文によっている。引用箇所は「断章」の部分とは別として、『選集』の頁だけを挙げておく。なおここでの項末尾の註を見られたい。ここに入るはずの註であるが、長さの都合で末尾に移したものである。

この「直接的生産過程の諸結果」のはじめに、マルクスはここでつぎの「三つの問題」を考察する予定であると告げている。第一は「資本制生産は剰余価値の生産である」こと、第二は「それ「資本制生産」は、この直接的生産過程を特殊資本制的な過程として特徴づけているところの全関係の生産および再生産である」こと、第三は「資本の、資本制生産の産物としての諸商品」(「選集」訳、三五九頁)^(註)。

(註) 執筆は第三、第一、第二の項目の順でなされており、「印刷のために最後のな仕上げをするさい」には第三の部分で最後

に置かれねばならぬと記している。マ・エ・レ研究所では「この指示にしたがって」として、原稿を第一、第二、第三の順に配置替えして発表している。マルクスの「指示」は「最後の仕上げをするさう」というのであるが、これを誤解して、たんに遺稿発表の「印刷」にさいして配置替え——本文中の諸々の箇所についても——をしているので、無用の混雑を招き、かえって読みにくくなっている。原稿の順序のままでも出し、補註乃至解説で補うべきであつたのである。

右の第一の部分——これは全体の三分の二ほどを占めている——では、資本のもとへの労働の形式的包摂、その現実的包摂、生産的労働と不生産的労働についての叙述が大きな部分を占めている。そして「第一篇」で上來取扱つてきた事柄をここで総括的に叙述しているようにも見える。しかし、これらはプランでの(5)のなかで——つまり「第四章」のなかで（プランの項目番号と「諸結果」執筆当時の章別予定とが一つづつずれていることについては末尾の註参照）——論じる予定の項目であるが、この原稿は上來述べてきたことを総括して述べているというより、事実上、「第四章」のこれらの項目自体についての原稿をなしているように見受けられる（のちに見るように、これと同様な書き方は「第三篇」のプランの「諸所得とその諸源泉」のさいにも見られる）。この原稿のなかで前述として挙げている章が「第三章」までであることによつても、右の推測が強められる。

つぎに右の第二の部分については、『資本論』第一部第七篇冒頭の第二十一章「単純再生産」で扱っている問題もこの第二で扱おうとしている問題にはかならない。そしてプランではこの「単純再生産」に当る項目を欠いていることが、これと関連して注意をひくことである。またこの問題、すなわち「資本制生産過程は、関連において考察すれば、または再生産過程としては、ただに商品を、ただに剰余価値を生産するだけではなく、それは、資本関係そのものを——一方には資本家を、他方には賃労働者を、生産しかつ再生産するのである」（一六〇七頁）という問題は、さらに第二十三章「資本制蓄積の一般的法則」において、発展させて取扱われているのであるが——「拡大された規模

での再生産すなわち蓄積は、拡大された規模での資本関係を再生産する」(一六四五頁)——、プランではこの「資本制蓄積の一般的法則」の項も欠いている。他方右の第二の部分では、そこでかたんながら資本制蓄積の一般的法則が定式化されて述べられているのである。くり返していうと、「諸結果」で考察を予定している第二の問題は、『資本論』では第七篇の二つの章において取扱われており、かつさきのプランにおいて第七篇に当るところで欠けている項目が丁度この二つの章の項目である、ということが見出されるのである。

(註) 「資本制生産はこの関係の再生産であるだけでなく、ますます拡大する規模でのその再生産である。そして資本制生産様式とともに労働の社会的生産力が発展するにつれて、労働者に対立して積上げられた富は、労働者を支配する富として資本としてそれだけ増大し、富の世界はかれに対立して、かれとは無縁なかれを支配する世界として拡大する。そしてそれに比例して、労働者自身の貧困、窮乏、隷属は反対に増大する。労働者の貧困と前記の潤沢とは互に対応し、歩調を揃えて進む。同時に、資本のこの生きた生産手段たる労働するプロレタリアートの大群が増大する。資本の増大とプロレタリアートの増加とは、したがって、対極的に分けられているとはいえず、同一の過程の一对をなす産物として現われる」(『選集』訳、四六七—八頁)。

最後に第三の部分であるが、その冒頭でマルクスはつぎのように述べている、——「ブルジョア的富の原基形態としての商品は、われわれの出発点であり、資本の成立のための前提であった。他方において、商品はいまや資本の産物として現われる。われわれの叙述のこの循環は、資本の歴史的発展にも照応している」(『選集』訳、四七四頁)。資本の産物として商品を考察するというのは、最初のように商品を個々の商品として独立に考察するのではなく、資本の総生産物の一可除部分として考察することであった。そしてマルクスはこの第三の部分は「第二巻」(第二部「三宅」——資本の流通過程——への橋渡しをなすもの)(同上訳、三五九頁)だとし、かかるものとして第一部の本論の末尾に置く予定であったのである。(註)

（註）この第三の部分をもって「橋渡し」とするということはどのように考えられていたか、つぎの叙述を見られたい。「だが、商品はその形態（その経済的形態規定性）から見れば、不完全な結果である。それ「商品」が、貨幣の形態でにせよ、使用価値としてにせよ、富としてふたたび機能しうる前に、それはまず一定の形態変化を遂げなければならない。われわれはそれゆえいま、商品を資本制的生産過程の直接的結果として一層詳しく考察し、ついでそれが通らなければならないその後の過程「資本の流通過程」を考察しなければならない」（同上訳、四七二―三頁）。また、独立して考察された個々の商品と資本の産物としての商品との差異について、「われわれが資本制的生産過程と流通過程とを詳しく研究すればするほど、この相違はますます明らかになり、商品価格の現実的な決定（これは第三部で扱う生産価格を指しているものであろう）等にもますます大きな影響を及ぼすであろう」（同上訳、四九九頁、「」内一三七）。このように第一部から第二部へ考察を移行する結び目として、さらに第三部へつながる点として考えられていたのである。

『資本論』ではこのような叙述の「循環」を末尾に置いて第二部への「橋渡し」とするという方法は採られていない。それと同時にここでは、第二十三章「資本制蓄積の一般的法則」が、量的に見て尨大な章となっているばかりでなく、問題の取扱い方もまさに「拡大された規模」で行われている。そしてこの章は第二十四章「いわゆる本源的蓄積」の末尾の節「資本制蓄積の歴史的傾向」に連繋しており、ここで第七篇が、したがってまた第一部がしめ括られる形になっている。つまり、「諸結果」の第二の部分「資本の蓄積過程」のなかに組込まれて、「単純再生産」、またとくに「資本制蓄積の一般的法則」として大きく取扱われ、これが第一部末尾の大論述となり、こういうことと並んでこの「諸結果」の第三の部分もここに置くことを取除かれた、という関係が見られるのである。

しからばなぜかかる変更が行われたのであろうか、ということがつぎの問題になる。これはやや推測的にししか説明されえないのであるが、まず、ことは第一部のしめ括りにかんすることが注意されねばならない。この「諸結果」を書いていたさいには、マルクスは第二部「資本の流通過程」を引続いて書き、第一巻のなかにこれを入れる予定であ

った（おそらく第三部も同じ巻に収めて、あるいは第二巻とするにしても同時に、出す予定であった）。ところが一八六六年二月にエンゲルスの強い忠告によって、第一巻だけをさきに刊行することになった（これについては後述）。同年十月にもこの第一巻はなお第二部を含む予定であった（同月十三日付クーゲルマン宛の手紙）が、そののち第二部が第一巻からはずされ、第一巻は第一部だけを含む一応独立的なものとして出されることとなった。第一部のしめ括りの変更は、まず、このような経緯と関係があると考えられよう。この変更によって第一部は第七篇で行われているようなしめ括りが採られて、第一巻で一応独立的な形にされた、と見られる。だがまた第二に、一八六四―五年の現行第三部の原稿執筆時と原稿『経済学批判』当時との間で——「諸結果」はこの後者とあまり時期を隔たないで書かれている（末尾の註参照）——、マルクスはその著述プランを大きく変更し、『資本論』四部作をもってそれ自体で完結した基礎理論を与えようとしたと見られるのであるが（後述）、「資本制蓄積の一般的法則」の章をいちじるじく包括的な形で展開しているのは、このことにもまたよるのであらうかとも考えられる。そしておそらくは、この両方の事情が作用して、「諸結果」に示されているような叙述の仕方が『資本論』第一巻末尾のような形に変更されたのではなからうか、——というように推測されるのである。

行きがかり上、いますこし立入って右のことにかんじて述べておこう。第一の方の事情で見ると、一八六六年十月にはまだ第一巻は第二部を含む予定であった、他方第一巻の原稿の完成——のちに附録として追加されることとなった価値形態論は別として——を告げている手紙がエンゲルス宛に書かれているのは一八六七年三月二十七日付である。したがって右の変更は六六年十月から翌年三月の間に行われたことになる。つまり、かなり押迫ってから変更され、第七篇の大きな部分があらたに書下されたことになる。だが、これに照応するような事実がエンゲルスによって

告げられている。すなわち、『資本論』第一巻第三版（一八八三年）はマルクスの歿後にエンゲルスの手によって、第二版とフランス語版とのなかにマルクスが書入れていた改訂、追加の指示に基づいて、つくられたものであるが、その序言においてこの改訂、追加についてエンゲルスはつぎのように記している。——「これらの変更と追加とは、僅かの例外を除いて、この書の最後の部分、すなわち資本の蓄積過程の篇に限られている。これ以前の諸篇はより根本的に手入れされていたのに、この篇では、従来の本文は、他の諸篇に較べてより多く最初の草稿に従っていた。*(folgte ein ursprünglichen Entwurf)*。だから文体はより潑刺としており、より多く一気呵成的であったが、しかしまた、より粗漏であり、英語特有の語法が混用されており、ところどころ不明瞭であった。個々の重要な諸契機が示唆されていただけなので、展開の足取りにはここかしこに断絶があった」（傍点・三宅）。「より多く最初の草稿に従っていた」というのは、他の篇に較べてより多くが最初の書下しのままであったという意味であろう。（第二版では「時間がなかった」（第二版へのマルクスの跋——一八七三年一月——）のでこの点に手を入れることは見送られていたのであるが、この第三版ではどの程度に改訂、追加されたのか、各版対照の機がないので分らない。第三部第二篇第八章のはじめに資本の有機的構成とはどういうことかという説明をしているところにエンゲルスは註を入れ、上のことは第一部の第三版では第二十三章のはじめにかんたんに展開されているが、初版および第二版はこの箇所を含まないから、かかる説明が必要だったのだと記している（註二〇）。これを見てもこの第三版での改訂、追加はかなり大幅であることが推測される。またこのとき見落されたものが第四版のさいさらに追加された。この第四版での追加は箇所が示されているが、このときも第二十三章にさらにつけ加えられている。ここに記したように『資本論』ではとくに「労働日」以下は、問題の取扱い方において資料的にいちじるしく拡充され、そしてその多くが最後の仕

上げのさいになされたと見られる。^(註一)だがとくに第七篇についてその荒削りが上のように認められ、マルクス自身その改訂を計っているのは、この篇の叙述が包括的であることにもよるであろうが、第一部末尾のプランがあとで変更されたために最後の仕上げのさいにその大きな部分があらたに書下された、ということと照応していると思われる。^(註二)

(註一) 「労働日」のところについては前に記したが、第四篇部分についてもつぎのようなことが述べられている。「僕はいままでに約三六ボーゲンだけ目を通した、……第四章はほとんど二〇〇頁もあるのに、細く印刷されていてほとんど眼につかない表題の附してある四つの節にしかなっていない。その上、思想の進行はたえず例証によって中断されており、しかも、例証されている点がすこしも例証の終りに概括されていない、……叙述の外的形式からすると、この第四章は、やはりきわめて急いで書かれ、推敲を重ねることのもっともすくなかったもののように見える」(一八六七年八月二十三日付エンゲルスのマルクス宛の手紙)。マルクスのその返事、——「第四章にかんしてだが、事柄そのものすなわちそれらの関連を見出すことで、大いに汗をしばった。それを見出したのちに、ブルー・ブックがつきからつきへと最後の仕上げの最中に転がり込んできて、僕は、僕の理論的成果が諸事実によって完全に確証されたのを見て有頂天だったのだ。最後に、行と借金取りの日参のもとで書いたのだ！」(同月二十四日付の手紙)。

(註二) エンゲルスは第三部の最後の章がほんのはじめしか書かれていないことについて、「このような結論的概括は最後の成稿のために印刷の直前まで留保するのがマルクスのつねであった。けだし、かくすることにによってかれは、最新の歴史の諸事件により、まちがいがなくつねに、かれの理論的展開についてのこの上もなく現実性をもった証拠を提供されるからである」(第三卷への序言、九頁)と述べている。エンゲルスは第一巻のときを想起してかくいつているのであろうかと思われるが、第一巻についてはすでに「諸結果」のような結論的部分が予定されていたのであるから、第七篇の上の事情はこのことだけでは説明されえない。

第一巻から第二部がとり除かれたのは、第二部が間に合いそうでなくなつたためか、第二巻(第三部)がすぐには刊行できないことが次第に明かになつたので第一巻を一応独立的な形にするためであったか、または第七篇が尨大化してきたためかもしれなく、あるいはそれらが合さつてのことであつたか、いずれにしても明かではないが、しかし、

第二巻（第二部、第三部）の刊行は焦慮していたが実際いつ出せるかについては確固とした予定は立っていなかったらしく、そのために第一巻を一応独立的な形にすることが計られた、ということとはほぼ確かであろう。マルクスは第一巻を書上げてのちただちに第二巻の準備にとりかかったようであって、第一巻校正中の一八六七年八月二十四日付エンゲルス宛の手紙ですでに、「私はいま第二部（流通過程）の終りを書いているが、これにさいして数年前のように、一つの点（固定資本の償却基金の問題）についてふたたび君を煩わさねばならない」と記しているが、翌一八六八年三月六日付クーゲルマン宛の手紙では、「第二巻（それは私の状態が変らなければおそらくけっして出ないでしょう）」といては、なかならず土地所有をも分析する。競争はたんに他のテーマの取扱いに必要な範囲でのみ」（傍点—三宅）といている。また同年十月七日付ダニエルソン宛の手紙のなかでもつぎのようにいっている、——「あなたは第二巻を待てません、その出版はおそらくお六カ月は延びるでしょう。昨年（および一八六六年）中にフランス、合衆国、およびイギリスでなされたある官庁調査（イギリス政府が行った各国の土地関係についての調査のこと、一八七〇年六月二十七日附クーゲルマン宛の手紙参照。—三宅）が完了するか公刊されるまでは、私はそれ（第二巻）を完成することができません。それにしてもかく、第一巻は一つのまとまった全体（ein abgeschlossenes Ganzes）をなしていきなす」。この手紙は、ダニエルソンがロシア語訳を申出て来たのにたいする返事であって、第二巻はすぐには出ないが第一巻だけでも「一つのまとまった全体」なのだ、という返事であり、そういった事情が顧慮されねばならないが、ともかくマルクス自身第一巻について一応右のように考えていたわけである。なおエンゲルスも、これまた第一巻の英訳本の刊行という事情の下においてはあるが、同様につきぎのようにいっている、——「われわれの翻訳はこの著作の第一部のみを包括する。だがこの第一部は、大きな程度において、それ自身で一つの全体をなすものであり、ま

た二十年来、一つの独立した著作と看做されていた。わたしが一八八五年にドイツ語で出版した第二部は、一八八七年末以前には公刊されえない第三部なしには、決定的に不完全である。第三部がドイツ語の原文で出版されたときに、両部の英語版の準備を考えることにして十分である」(英語版への序言、傍点一三宅)。

なお、第一巻を一応独立的な形にするために、そして他方著述プランの変更のために第七篇での叙述が一応自足完了的な、かつ拡大された形になったと考えられるが、しかしなおここで、たとえばつぎのように、——「諸資本のかかる集中の、すなわち資本による資本の吸引の諸法則は、ここでは展開されえない。かんとんな事実的指示で十分である」(一六五九頁)と記し、集中、したがって競争については「ここでは展開されえない」としていることは、そこでしかもなお、「かんとんな事実的指示」を——信用制度の形成、株式会社の形成による作用に言及して——与えていることとともに、注意さるべきである(これと同様な例として、本誌前号七六頁参照)。またここでは「競争と信用」とが「集中のもっとも有力な両横杆」であることが指摘されている(一六六〇頁。ここ以下六二頁までは第四版のさいに追加されたものである)。また、前記のように「資本制蓄積の一般的法則」の章は「資本制蓄積の歴史的傾向」に連繋しており、そこで第七篇が、したがってまた第一部が最終的にしめ括られている形になっているが、周知のようにここに、みずからの労働に立脚する私的所有を駆逐するところの、他人の労働の搾取に立脚する資本制的私的所有が、諸資本の集中によって、それ自身の否定を生み出す、——「収奪者たちが収奪される」——、といった叙述が置かれている。だがこの叙述も、こういったことを指摘しているにとどまるのであって、マルクス自身、かかる事柄を理論的に展開しているものだと考えていたのではない。このことはさきのように、「諸資本のかかる集中の諸法則は、ここでは展開されえない」といっていることから明かである。そこで「かんとんな事実的指示」といっているのと同じ

性質の叙述なのである。

（註）前掲の「第一篇」のプランでは「生産過程の結果」は「七」となっているが、この「直接的生産過程の諸結果」の原稿の表題では「六」となっている点、およびこの原稿の執筆時期などについて考察しておく。

まず第一の点であるが、その前に前掲の三訳本ともこの原稿の表題を「第一巻、……」と訳しているが、これはおそらく Buch（部）を Band（巻）と同様に巻と訳してしまったものと思われる（本誌前号、八六頁参照）。ただし一八六六年十月十三日付クーゲルマン宛の手紙にも見られるように、マルクスは第一部の印刷用原稿の作成がすでに半ばに及んでいたと見られる頃においても「第一巻ははじめの二部を含む」と考えていたのであり、またすぐつきに見るようにこの「諸結果」の原稿では第一部に「商品および貨幣」を入れない予定であったが、この手紙のときにはすでにこれらを「一つの章」として入れる予定を示しているからである。

つきに見る事柄にも関係するので、ここで右の一八六六年十月十三日付クーゲルマン宛の手紙を掲げておく。「私は来月、最初のボーゲンをマイスナー〔出版商会〕に送るつもりでいる。そして残部を自分でハンブルグに持ってゆくまで、この方法を続ける。……私の事情（身体上および俗生活上の中断）のために、最初考えていたように両巻を一度にではなく、第一巻をまず出さねばならない。またいまのところおそらく三巻になるであろう。著作全体はすなわちつぎの諸部分にわかれる。第一部、資本の生産過程。第二部、資本の流通過程。第三部、総過程の諸姿容。第四部、学説史のために。第一巻ははじめの二部を含む。第三部は第二巻に、第四部は第三巻になるだろうと思う。私は、第一巻において、ふたたび、全然は、じめから始めることが必要である、すなわち、ドゥンカーから出した私の著述『著書『経済学批判』』を商品および貨幣にかんする一つの章に概括することが必要であると、考えている。私がおのそのことを必要だと考えたのは、ただに完全のためからばかりでなく、頭のよい人たちがさえそれを十分正しく理解しないところを見ると、最初の叙述に、とくに商品の分析に、なにか欠陥があるにちがいないからである」（傍点―三七）。

プランでは「七」となっているが原稿の表題では「六」となっていることについて、アー・レオンチェフはこの原稿発表に附して書いた論文「マルクスの未発表原稿について」のなかで、つぎのように述べている。「この項目は右のプランでは第七という番号の下に現われているが、ここではそれは第六という番号をもった篇をなしていることは、興味あることである。明

かに、この覚書はのちになって変更せられ、第七項より前の項目の数が一つ減ったのであろう」(研進社刊『諸結果』、一六頁)。だが、この「七」が「六」になっているのは、プランの内容的な変更によるのではなく、たんにプランの「一」の「序説。商品、貨幣」を別にして番号が附されているからにすぎない。そればかりでなく、プランで「一」「云々と記していたのも、おそろくたんにそう記してただけで、当時、「第一篇、資本の生産過程」のはじめに実際にこれを再説して入れるつもりではなかった、と見受けられる。

「諸結果」の原稿執筆当時には「(1)。序説。商品、貨幣」についての叙述を除いていたことは、この原稿のなかでのつぎのような記述からかたんに知ることができる。「第二章において述べたように、労働過程の一般的諸契機、したがってたとえば、労働者自身の生きた労働に対立する対象的労働条件の材料と手段とへの分割等は、生産過程の歴史のおよび特殊の社会的性格とはまったく関係のない……規定であって……」(「選集」訳、四一八頁、傍点―三宅、以下同じ)。この「第二章」はプランでの「(2)。貨幣の資本への転化」ではなく「(3)。絶対的剰余価値」を、そしてとくにその「(a)。労働過程と価値増殖過程」を指していることは、まちがいないであろう。また曰く、「第三章において、くわしく述べたように、相対的剰余価値の生産とともに……生産様式の現実的なすがた全体が変化し、特殊資本制的生産様式が発生し……」(同上訳、四二二頁)。この「第三章」はプランの「(4)。相対的剰余価値」であることはいままでもない。等々。

またプランでは「商品、貨幣」を「一」としているが、当時これを再説して入れるつもりではなかったであろうことは、このプランを書いたとほぼ同じ時期の一八六二年十二月二十八日付クーゲルマン宛の手紙で、今度出そうと考えている部分の範囲を告げて、つぎのようにいっていることからも窺うことができる。――「それは実際、第一篇の第三章をなすべきだったもの、すなわち資本一般を、包括しているにすぎない」。この手紙のなかでマルクスは今度出そうとしているものを「第二巻」と呼び、著書『経済学批判』を「第一分冊」と呼び、この両著を一冊に合せて英語版を出版したいといっている。^{*}なお、商品論、貨幣論を置く位置としては、本来は、資本の生産過程の前に前章として置いた方が――それは著書『経済学批判』当時示していたプランであった――より適当であると考えられよう。

※ マルクスがいつ頃から予定を変えて再説することとしたのかは明かでないが、一八六五年十一月二十日付エンゲルス宛の手紙ではまだ、現行第一部第三篇で扱っている事柄についてエンゲルスに材料提供を依頼し、「これらの詳細を知らなければ

ば僕は第二章を書き上げることができない」といつてゐる。マ・エ・レ研究所刊 *Briefe über „Das Kapital“* (1954) の編集者はここに註を附して「マルクスはこの手紙で第二章に関係するとしてゐるが、書き誤りである。これらの問題は初版の第三章で取扱われている」云々と記してゐるが、他に根拠がないかぎり、これは編集者の「誤り」であつて、マルクスは書き誤つて「第二章」と記してゐたのではない。

この「諸結果」の執筆時期については、レオンチェフは、「ここに発表する原稿は、マルクスが一八六一—六三年のノートを書き終つたのちに書かれたものである。これらのノートの多くの個所の内容が、この稿のなかで利用されている。ことに第五冊の内容と第二十一冊の大部分の内容が利用されている」（研進社刊前掲書、一八頁）とし、またこの原稿ではまた *Arbeitsvermögen*（労働能力）とさう語が *Arbeitskraft*（労働力）の代りに使用されてゐると述べてゐる。

レオンチェフは、一八六一—六三年のノートの「のち」のものだという判断をした根拠としては、右のようにこれらのノートが利用されてゐることをもつてしてゐるのであるが、いかに利用されてゐるかは生産的労働と不生産的労働についてしか示されていない。ところでいかに「利用」されてゐるといつてゐるかをみると、右の文章のすこし前ではつぎのように述べてゐる、——「たとえば、この篇のなかには、生産的労働と不生産的労働とにかんする一節があるが、『剰余価値学説史』第一巻の附録は、この問題をさらに展開したものである。（この附録はそれ自身また一八六一—六三年に書かれたノート第二十一号からの抜萃である）」（同上書、一七頁、傍点—三宅）。とすれば、このことは、この原稿が右ノートの「のち」のものだということをしるべくなくとも根拠づけるものではないであらう。ところがまた、さきの文章のすこし後ではつぎのようにいつてゐる、——「この部分「第一の部分のこと」は、生産的労働と不生産的労働とにかんする諸問題のくわしい研究を含んでゐる。この問題の叙述は、『剰余価値学説史』第一巻の附録として掲げられてゐる叙述に、後で修正を加えたものである」（同上書、二〇頁、傍点—三宅）。この正反対の二様の判断が——誤訳でないとする——レオンチェフにおいてどのように統一されてゐるのか不可解であるが、『剰余価値学説史』の「生産的労働の概念」と「諸結果」の「生産的労働と不生産的労働」とを較べてみると、ほぼ同一の内容であつて、この内容からは両者の執筆時期の先後を判断するのは困難のように考えられる。

諸般の事情から推して右ノートの「のち」のものであることはまちがいないであらうが、示されている根拠が不審なので附言した次第である。なお、「労働能力」という語が用いられてゐる点は、右ノートと同じであるが（『剰余価値学説史』第一巻へのカウツキーの序文参照）——したがつて「のち」であつてもあまり時期は隔たつてゐないであらう——、右ノートとち

がつてこの原稿ではすでに「生産価格」という語が用いられているところがある（『選集』訳、五〇一頁、他の二訳でも同じ）。また「総生産物と純生産物とのこの区別には、伝統的にいろいろ混乱した観念が結びついている。このことは一部分はフィッシュオクラート（第四巻参照）に、一部分は、資本制生産をなおちこちで直接的生産者のための生産と混同しているA・スマイスに由来している」（同上訳、四五五頁）という記述がある。この「第四巻」が「第四部」の誤訳だとすると、学説史の第四部への移管と関連して、眼につくことである。

つぎに「第三篇」のプランを見て、この挿入的考察を終え、行論の本筋に立ちかえる。

（未 完）